

甘えることは許されない

日時●2023(令和5)年8月27日(日) 2回上映

①10時30分～12時30分 ②13時30分～15時30分

入場料●300円(当日のみ。資料代含む)

会場●藍住町総合文化ホール 大ホール

771-1203 徳島県板野郡藍住町奥野字矢上前32-1

☎088・637・3344





主催●徳島で柳澤壽男監督作品をみる会

(代表=NPO法人太陽と緑の会 ☎088・642・1054)

共催●藍住町総合文化ホール

●柳澤壽男監督(1916～1999、享年83)は、近年高く再評価されているドキュメンタリー映画の巨匠です。小川伸介、土本典昭、黒木和雄などの優れた監督が尊敬したことで知られます●特に福祉ドキュメンタリー5部作は、障がい者問題を静かに見つけ、色あせない問題提起を我々に投げかけてくる力強い作品で、東京や神戸などで上映会が行われています●映画史的には2018年に新宿書房から分厚い資料集『そっちやない、こっちや 映画監督・柳澤壽男の世界』が刊行されたことで、その作品評価はゆるぎないものになりました●この企画は、監督の弟子筋にあたる太陽と緑の会・杉浦良が、天国の師匠に捧げる渾身企画です●徳島で5年間かけて柳澤福祉ドキュメンタリー5部作を藍住町総合文化ホールで上映する試みです。多数ご参集ください。

アクセスマップ

-  徳島バス藍住線「藍住役場前」停留所より徒歩5分
-  JR線「勝瑞」駅下車後、車で10分
-  徳島自動車道「藍住IC」より、車で7分
-  高松自動車道「板野IC」より、車で7分



駐車場案内図



お問合せ

藍住町総合文化ホール
〒771-1203 徳島県板野郡藍住町奥野字矢上前32-1
TEL 088-637-3344 FAX 088-637-3345
利用時間…9:00～22:00
受付時間…9:00～18:00
休館日…第4月曜日(祝日の場合は開館)、
12月28日から翌年1月4日まで

甘えることは許されない

監修＝近藤文雄
製作監督＝柳澤寿男
脚本構成＝厚木たか
撮影＝坂本力康
音楽・録音＝菊地進平
ナレーター＝久米明
監督助手＝土屋富士夫
撮影助手＝今野純一
編集＝青木千恵
タイトル＝菁映社
録音スタジオ＝アオイスタジオ
現像＝東洋現像所
1975年/16ミリ
カラー/105分

仙台の重度身体障害者収容授産施設、西多賀ワークキャンパスで働く人々の記録。



■制作者から
障害を受けている人のすべてが、働いて自立したいという強い願いを持っています。「自立の芽生えを育てるための保護を」切望しています。しかし、「保護」という名の「飼育殺し」などのそんではいけないのです。だが、日本の社会には、「自立の芽生えを育てるための保護」施設は殆ど無きに等しく、たとえまた、立派に自立できる能力があっても身障者であるがためにこれを受け入れる職場など殆どない有様です。このことは、身障者が、日本国憲法にうたわれている、「働く権利」からいかに程遠く位置づけられているか、憲法の保障の、外におかれていくかを明らかにしているものです。

「働く」とはどのようなことなのでしょう。私たちが、工場や会社や役所などに雇われ、ものを作ったり、売ったり、また事務をとったりし、その代償として暮しの資を得ること、それだけを、「働く」と定義するならば、そのような貧しい通念のために、身障者は社会的にどれだけの不利をこうむることでしょう。いったい、社会の役に立つとか立たぬとかは何をもって計れるのでしょうか。私たちは人間として生まれてきたその尊厳に立ち、そのことを根源にたちかえってみなければなりません。

「この世の中には、なんの役に立ちそうもない重度や重症の子供たちひとりひとりが、かけがえない生命をもって」おり、「誰とにかえることも出来ない、個性的な自己実現を」している。一つには障害をもつ子供たちが、自らその障害と闘い、障害を克服していく努力のなかで、その人格が豊かにのびていく、貧しい狭い人格でなく、豊かな暖かい人格に育って行く。それが対自己への生産活動であり、もう一つはその真剣な営みを通して、対他者へ或いは対会社へ働きかけていく。

この自己現実こそが創造であり生産である。近江学園やびわこ学園を創設し、多くの障害児の療育に一生を捧げられた、故糸賀一雄先生はそう話されています。

「働くことこそわが生き甲斐」といわれる障害者の人々。誰ととりかえることもできないわが人生を、「働くこと」によって、『私』がここに生きた、その生きた意味があるように生き

たい」といわれるその人々の、働くことへの痛みまでの自覚は、どうやら五体に不足がないというだけで逆に、うかつな人生をやり過ぎている私たちに、深い反省を迫らずにはおられません。映画を作らねばと思った理由は、先ずここにあります。

私たちは昭和四十八年十月から仙台の重度身体障害者収容授産施設西多賀ワークキャンパスにカメラと録音機を持ちこみました。車椅子や松葉杖を頼りに働く人たちと共にひたすらに「働くとは一体どういうことか」を考え行動してきました。

この映画「甘えることは許されない」はその記録です。映画制作を終って私たちはあらためて私たち健体者が障害者の立場にたつてものを考え行動するのが、どんなにむずかしいことかを知りました。

私たちは私たちが障害者について多少知っていることと自負していたのは私たち健体者の傲慢にすぎなかったことを教えられました。

私たちは再び前作「ぼくのなかの夜と朝」の制作自主上映の時と同じように、「雲の形を言葉に置きかえることで、えらい人やえらくない人が決められる、そういう文明であれば、この人たちにひげ目はないだろう」と。

私たちの文明の盲目と非力について深く反省せずにはおられません。

この映画の監修者近藤文雄先生は、「社会福祉とは障害を受けている人たちや病弱の人たちと私たち健体者との人間関係の豊かな発展のなかにその真髄がある」と教えられています。

私たちはこの国の現在の社会福祉の状況は先生のこの教えに逆行しているようにみえてなりません。

それでも、尚私たちが人間の心を持った社会福祉を望むなら、私たちはもっと深く障害を受けている人の身になって物事を考えるように力を尽くさなければならぬのでしょか。